

大学院 音楽研究科修士課程 日本音楽研究専攻活動報告

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター 公開日: 2021-09-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15014/0000000369

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.



令和2年度現在、修士課程日本音楽研究専攻では、8名の修士学生が研究に取り組んでいます(休学中含む)。

今年度は3名が修士論文を提出し修了しました。うち2名は、修士論文審査にかかるプレゼンテーション「オンライン伝音セミナー」の講師に挑みました。

I 2020年度修了生の修士論文題目と要旨 およびオンライン伝音セミナー開催報告

■志川 真子

民俗芸能 復活の諸相

——桂六斎念仏を一事例として——

Issues in the Revival of Folk Performing Arts:
The Case of Katsura Rokusai Nenbutsu

六斎念仏は、近畿地方を中心に日本各地に伝承されている民俗芸能である。仏教経典に説かれる六斎日と念仏信仰が結びついたとされ、太鼓や鉦を叩きながら念仏を唱える形態をもつ。中でも京都で伝承されている六斎念仏は、能や獅子舞、祇園囃子など他の芸能を取り込んで昇華し、独自に発展を遂げてきた。

現在京都では、14の保存団体によって六斎念仏が伝承されている。その中で、本論で扱う桂六斎念仏(以下、桂六斎)は、14年間の休会を経て令和元年に活動を復活した。休会前の桂六斎については、田井竜一による詳細な報告があるが、対して本研究がおもに扱うところは令和の復活、その実態である。

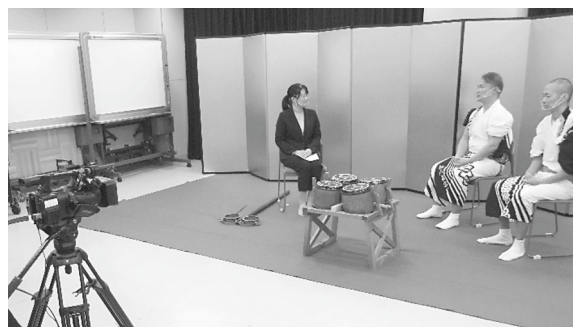
本論では、下記の1の論点にもとづき令和2年の桂六斎の活動の様子を客観的に記述すると共に、下記の2から4の論点について考察を行った。

- 1) 一度中断した桂六斎がどのように復活したのか、その復活の過程と現状を客観的かつ詳細に記録した。
- 2) その上で、復活を果たした民俗芸能の一事例とし

て桂六斎の活動を観察し、一度中断した民俗芸能が復活する際に必要な条件や復活の要因等を導き出した。

- 3) 参加者の多様化がもたらした影響を考察した。その影響は随所に見られたが、特に注目すべきは、経験者が新規伝承者の獲得や教育のために、歴史観や行事の意義、芸能の価値等について再考する態度が見られた点である。
- 4) 地域の「景色」の再興に着目した。桂六斎の復活を推し進めてきた人々にとっての復活とは、地域の景色の再興をも意味していた。六斎念仏が地域に鳴り響く景色は、復活させる当事者にとっては過去の景色の再興を目指すものであるが、同時に、桂六斎を知らない人々にたいする地域の未来像の提言ともなっている。景色の再興において、過去と未来が表裏一体である様相が浮かび上がってきた。

「復活」を辞書で引くと「一度消失したものが再び元の状態に戻る」とある。民俗芸能の復活における当事者たちも、かつての芸能を復元しようとする意識や、過去への憧憬を抱いている。にもかかわらず、民俗芸能の復活には、芸能や伝承方法はもちろん、運営や地域社会との関係、また人々の意識など、さまざまな事象の変化が伴う。なぜなら民俗芸能は、芸能を取り巻く外的要因と、芸能を担う伝承者による内的要因から、多面的に影響を受けるからである。民俗芸能における復活とは、過去への回帰と、必然的な変化とが拮抗し合う場であるとも言える。





オンライン伝音セミナー第2回
「京都六斎念仏の今一桂六斎念仏を中心に」
2020年12月9日 FaceBook ライブ配信

■三好 真利子

奏法から見る地歌三味線の音楽的特性

——組み合わせの多様性と左手奏法による旋律構成に注目して——

The Musical Characteristics of Jiuta

Shamisen: Focusing on Different Kinds of
Playing Techniques

本研究は、江戸時代以降に上方（京都、大坂）を中心として発展してきた、三味線の弾き歌いによる家庭音楽・座敷音楽である地歌について、その音楽的特性を、曲中における三味線奏法の組み合わせに着目して分析、考察したものである。なお、本研究で取り扱う地歌作品とは、江戸時代に成立した、いわゆる古典曲を指す。

地歌の音楽的特性については、ポルタメント的奏法を多用し、繊細で高度な技巧性と強い器楽性を持つと説明された例はあるが、「ポルタメント的奏法」「技巧性」「器楽性」といった言葉が何を指すのか、実際の地歌作品中の具体的な奏法やその組み合わせに詳しく言及して研究された例はない。

そこで本研究では、地歌三味線における奏法の組み合わせが持つ豊かな多様性と、左手奏法による旋律構成に注目して、地歌の音楽的特性を明らかにすることを試みた。地歌三味線の各奏法の特徴についての考察と、地歌三味線が持つ、奏法の多様性を重んずる価値観についての考察から2つの仮説を導き出し、これらを検証するために、地歌から長唄・宮園節へ移行され

た曲について、地歌作品と移行先作品で使用されている奏法の、それぞれの使用率と組み合わせの比較分析を行ったほか、地歌の複数の曲種から選出した作品について、曲中に使用されている奏法の複雑な組み合わせを分析した。

地歌は長唄・宮園節に比べ、曲中や旋律中に使用されている奏法が多様性に富み、左手奏法の使用率が高く、左手全体の運動が活発であるとの結果が得られた。また、地歌作品に使用されている奏法の分析では、主に左手奏法により発音される、比較的音量の小さな音が、他の音に従属する装飾音としてではなく、自立して旋律を構成する音として使用されていることが確認できた。地歌作品の中では、発達した手事を持つ作品ほど、奏法の多様性が豊かであり、左手奏法による旋律構成も多く行われていると考えられる。

本研究で明らかになったものより一層包括的な地歌の音楽的特性を明らかにするため、本研究では取り上げなかった、語り物的要素を強く持つ他種目三味線音楽や、地歌のうち浄瑠璃物に分類される作品についても分析することが、今後の課題である。

■張 曦媛

『東皐琴譜』における琴歌《高山》の打譜

Dapu Interpretation of Qin-song Titled

GaoShan Included in the Qin Anthology

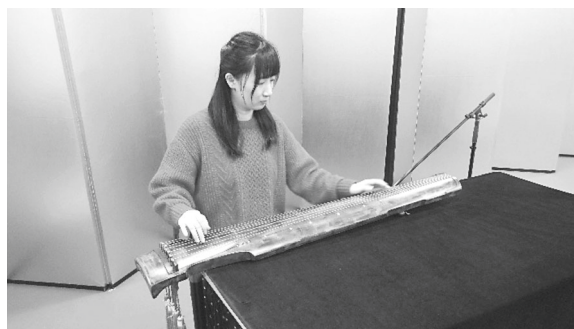
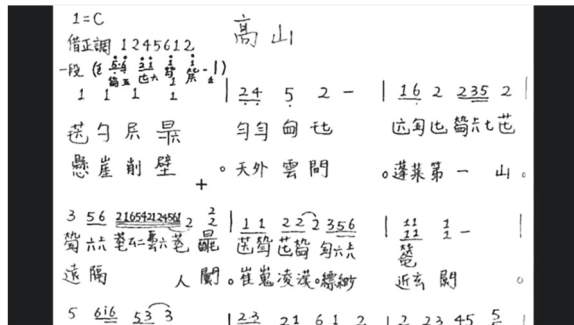
Dong Gao Qin Pu

中国で生まれ、長く伝承されてきた伝統楽器の琴は、日本においても伝承されてきている。本研究は、江戸時代に、中国から日本に渡ってきた禅僧のひとりである、東皐禅師が伝えた琴の音楽のうちの一曲、琴歌《高山》に焦点をあてる。

東皐禅師は、日本で活動している間に多くの弟子を育てたが、その弟子たちによってまとめられたのが『東皐琴譜』という楽譜集である。本研究でとりあげる《高山》は、琴歌すなわち、琴を弾きながら歌を歌う演奏形式である。

本研究では、国立国会図書館に所蔵されている『東皐琴譜』に収められている琴歌《高山》の打譜を行った。打譜とは、減字譜で残されている作品を、演奏可

能な作品として解釈する行為をさしている。打譜は「復元」と似ているようで異なる。打譜には演奏者ごとの個性がこめられるからである。本研究によって、私独自の打譜を完成することができた。



オンライン伝音セミナー第5回「琴歌《高山》の打譜」
2021年12月9日録画配信（4日FaceBookにて
ライブ配信予定であったが機材不具合のため後日
YouTube上にてストリーミング配信された）

Ⅱ 在籍生の研究活動

■章 又文

近代音楽史において、中国「新音楽」と「新日本音楽」は、西洋音楽を受容する際に、前の時代から継承してきた伝統音楽を守る立場と、西洋音楽の技法や理論を取り入れ、新しい音楽を発展させる立場とがどのような関係にあったのかを明らかにすることである。両国の音楽でほぼ同じ時代に伝統音楽の革新活動が始まった。この二つの「新しい音楽」は東アジアの音楽的伝統を刷新した。このような「運動」が出現したのは偶然ではないと思う。両国の伝統楽器の発展はこの運動に影響された。このような点から考え、中国「新音楽」と「新日本音楽」を比較研究することは非常に価値があることだと思う。



■荒野 愛子

実技研修制度を利用し、小鼓のお稽古を受けました。私の研究対象である能楽の作曲面において、囃子の実技を学ぶことができたのは大きな収穫でした。11月には、観世会館にて、吉阪一郎先生主催の「若葉会」において、金剛龍謹先生の謡で『熊野』を演奏しました。プロの方との共演は、実際の謡と囃子のアンサンブルを経験できた貴重な機会でした。これからもお稽古を続け、より能に親しみ、理解を深めたいです。



■孟 祥健

楽律学とは中国音楽理論の中心としているものです。古来、楽律に関する多くの理論や著作が書かれていました。修士一年生の間に、中国の『何承天新律』『荀勗笛律』『楽書要録』『琴律説』と日本の『琴学大意抄』『律原發揮』などを解説し、検討しました。江戸時代における楽律学には、中根璋、荻生徂徠、富永仲基などの楽律家それぞれに独自の展開があり、その中で特に荻生徂徠の楽律思想は、集大成に位置づけられます。更に琴学と結び付けることでその研究価値は一段とたかくなります。この検討を今後の課題研究にしたいです。

■関本 彩子

前年度に引き続きベルゲン大学で民族音楽学やノルウェー語の授業を受けていました。Covid-19の影響で、2020年3月に大学構内への立ち入りが禁止され、その後はオンラインで授業が行われるようになり、聴講しました。

帰国後は、西宮市令和2年度未来づくりパートナー事業「能『西宮』を謡おう！」のワークショップや講演・発表会に参加しました。能「西宮」は、室町時代に作られ現在は上演されていません。初心者の人でも参加できるような「西宮」の謡をワークショップで体験し、これまでの復曲に向けた試みなどを講演で聴くことができました。